

エリザベス・クレイヴンのグランド・ツアー

志 渡 岡 理 恵

1. はじめに

17世紀半ばまでには制度として確立していたと言われるグランド・ツアーは、裕福な貴族の子息が教育の仕上げとして行うヨーロッパ旅行だった¹。イギリスの支配階級の一員として国の中枢を担うのに必要な教養を身につけるべく、貴族の息子たちは、主にフランスやイタリアで礼儀作法、社交術を学び、古代ギリシャ・ローマの遺跡、建築物、美術品などを鑑賞した。また、諸外国を観察して政情を把握し、王侯貴族や各国の外交官たちとのネットワークを築くことも旅の目的のひとつであった。

同じ貴族の生まれであっても、娘がグランド・ツアーに送り出されることはなかった。女性には爵位や土地の相続権はなかったからである。しかし、制度的なグランド・ツアーとは別の枠組みでヨーロッパ大陸を旅した女性たちは少なからず存在した。ブライアン・ドラン（Brian Dolan）は、そのような旅の機会に恵まれた18世紀イギリスの女性たちに注目し、研究書『グランド・ツアーに出掛けた貴婦人たち』(*Ladies of the Grand Tour*)を2001年に上梓した。ドランによれば、これら上流階級および中産階級の女性たちは、旅によって家庭での抑圧から逃れ、自分自身の関心・能力を探求し、さまざまなことを学び、楽しみ、心身の健康を取り戻した。そして「教養あるイギリス女性というアイデンティティ」(“the identity of British learned ladies”)を獲得した(12)。

本稿で取り上げるエリザベス・クレイヴン（Elizabeth Craven）も、そのような女性たちのひとりである。彼女は1750年、イングランド南部のドーセット州で伯爵家の末娘として生まれた。1767年にクレイヴン伯爵と結婚して6人の子どもをもうけたものの、1780年に夫と離別すると、彼女はヨーロッパ大陸へ渡り、フランス、イタリア、ポーランド、ロシア、トルコ、ギリシャを旅し、1789年に旅行記を出版した。これが、今回取り上げる作品『クリミア経由コンスタンチノーブルへの旅』(*A Journey through the Crimea to Constantinople*)である。

旅の後、エリザベス・クレイヴンはアンズバック（現在のドイツ南東部アンズバハ）へ向かい、ドイツ貴族の辺境伯のもとに身を寄せた。1791年に夫のクレイヴン伯爵が死去すると、翌月、彼女はこの辺境伯と結婚する。翌年、再婚相手は領地をプロシア王に売り払い、夫妻はイングランドに移住した。1806年

に再婚相手が亡くなると、彼女はイタリアへ渡り、1828年、ナポリで死去した。

『クリミア経由コンスタンチノーブルへの旅』は、エリザベス・クレイヴンが旅の途中で後の再婚相手に送った68通の手紙から成っている。出版には、ゴシック小説『オトランド城』(*The Castle of Otranto*, 1764)の著者としても有名な友人ホレス・ウォルポール(Horace Walpole)の勧めが影響していたと言われている。社交的だった彼女は、貴族の家系と社交術を活かして、行く先々で王侯貴族や各国の外交官、軍人たちと交流し、そのネットワークを利用して旅を続けた。移動手段は主に馬、馬車、船で、ロシアでは馬が引くホロ付きソリを雇ったり、クリミアからコンスタンチノーブルに移動する際には、商船を装ったフリゲート艦を用意してもらったりしている。

旅行記からは、エリザベス・クレイヴンの華やかで勝気、社交術にたけ、冷静で好奇心旺盛、そして何より判断力と決断力に優れ、勇敢で活発な女性という人物像が浮かび上がってくる。彼女は旅先で状況によって臨機応変に行先と移動手段、ルートを変更しているが、イタリア滞在中に北上してロシアへ向かう決心をしたときには、“Now I am on the wing, I will see courts and people that few women have seen, as I may never have an opportunity of travelling again; and I will make the best use of my time....”(120)と述べ、見知らぬ国への好奇心と、他の女性たちに先んじてロシア見物をする優越感をのぞかせている。また、サントペテルブルクからクリミア半島に移動するのに、馬が引くホロ付きソリに乗った際のスリリングな体験については、以下のように記している。

These carriages are upon fledges, and where the road is good, this conveyance is comfortable and not fatiguing; but from the incredible quantity of fledges that go constantly upon the track of snow, it is worn in tracks like a road; and from the shaking and violent thumps the carriage receives, I am convinced the hardest head might be broken. I was overturned twice.... (185)

道の悪い場所では「どんな石頭でもつぶれる」ほど激しく揺れて「2回転覆した」と語るユーモア溢れる口調からは、このような事故などものともしない逞しさと余裕が伝わってくる。さらに、ギリシャの有名な洞窟を見学に出掛けたときには、入り口が狭く、這いつくばらなければ中に入れなかったようだが、躊躇する様子は微塵も見せていない。

I was obliged to crawl in...it required a good deal of courage and dexterity to proceed...in one or two places, through holes on the left, we could look down

perpendicularly into the grotto, where I arrived safely, refusing constantly to be assisted, for I thought myself in greater safety in trusting to my own hands and feet than to the assistance of others, who had enough to do in preventing themselves from slipping. (322-3)

この記述には、見たいものを見るためには這いつくばることも厭わず、危険をも顧みない彼女の性格が表れている。また、「手を貸しましょうという申し出をずっと断り続けた。というのは、他の人に頼るより自分の手足に頼った方がはるかに安全だから」という言葉からは、彼女の冷静な判断力と自信がうかがえる。そして、一連の旅を終え、トルコから帰国の途につくときには、“Most women would be frightened with the journey I am taking; but I must get out of this country of Mahomet’s now I am in it, and so I shall proceed cheerfully and merrily....” (377) と、自らを鼓舞している。彼女は、ブルガリアからトランシルバニアを経由してウィーンに進むルートを選択していた。途中でトルコ人の野次馬に取り囲まれたり、暗い森の中で一夜を過ごしたりと大変な旅だったようだが、「快活に、陽気に」それを成し遂げた。

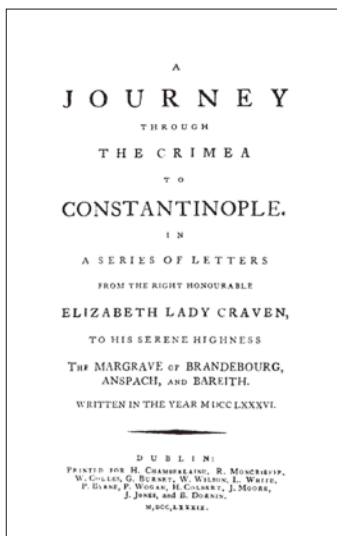
同時代の著名人も、上記のようなエリザベス・クレイヴンのしなやかな強靱さに驚嘆していた。ウォルポールはエリザベス・クレイヴンへの賛美を何度も表明しているが、『オックスフォード英国人名事典』(*Oxford Dictionary of National Biography*)によれば、1780年5月に彼女の劇作品がドルーリー・レーンで上演された際には、劇場で目にした彼女の美しさを褒め称え、あんなに若い女性が完全に落ち着き払っているのを見るのは驚きだ、と述べている。そして、それとは対照的にいらいらした様子の夫のクレイヴン伯爵を皮肉っている。

貴族の家に生まれ、17歳で伯爵夫人となり、30歳で夫と離別し、30代で当時ほとんどのイギリス女性が訪れたことのない地を気の向くままに旅したエリザベス・クレイヴンは、イタリア、ロシア、トルコ、ギリシャのどのような側面に関心を持ち、それらをどのように表現したのだろうか。彼女の旅行記に関する先行研究は数少ない。先述のドランもエリザベス・クレイヴンについては数行しか言及していない。他の論文の主な関心は、1710年代にトルコ大使夫人としてトルコを訪れたメアリ・モンタギュ (Mary Montagu) との比較にあり、クレイヴンの旅行記全体を分析して評価したものはない。本稿の目的は、クレイヴンの旅を女性版グランド・ツアーとして捉え、その旅行紀全体の特徴を詳らかにし、これまでの研究に欠けていた視点を提供することである。



図版1

エリザベス・クレイヴンの肖像画
ナショナル・ポートレート・ギャラリー所蔵
Elizabeth Craven (née Berkeley), Margravine of
Brandenburg-Ansbach by Ozias Humphry, oil on canvas,
circa 1780-1783 NPG L223



図版2

『クリミア経由コンスタンチノーブルへの旅』
1789年ダブリン版の表紙



図版3

『クリミア経由コンスタンチノーブルへの旅』
1789年ダブリン版に付された地図

2. イタリア表象

手紙の日付から推測すると、エリザベス・クレイヴンは1785年9月11日頃から3か月ほどイタリアに滞在したようで、訪れたのは、ジェノヴァ、ピサ、ルッカ、フィレンツェ、ボローニャ、ヴェニスなどである。イタリアは彼女にとって目新しい場所だった。イタリアに到着した日の手紙の中で彼女は、“...everything I see here is so unlike any thing I ever saw before, that I am at the window gaping like a country-miss, that is in London for the first time in her life” (82) と、見慣れない景色に胸を高鳴らせている自らの姿を「初めてロンドンに来た田舎娘」になぞらえている。ヴェニスでも、「ここは新世界だ」という感想を漏らしている。

イタリアでの旅の記録はとても多彩である。クレイヴンは、街の様子、貴婦人たちの娯楽、女性のファッション、奴隷、黒人の聖母子像、ローマ皇帝の浴場、大聖堂、ピサの斜塔、共同墓地、ブドウの育て方、美術品、料理、ゴンドラ、ドミノ仮装、サンマルコ広場、教会、屋敷、オペラ、各国の公使や夫人たちとの交流などを次々に語っている。彼女はどの国においても女性の暮らしぶりに注目しているが、イタリアの女性たちについては、「メザロ」(“mezzaro”) と呼ばれる2ヤードほどの布地で頭と肩を包んでいることに興味を示している。

All the women wear what is called a mezzaro, viz. about two yards or more of black silk or chintz, wrapped about their heads and shoulders, instead of a cloak; it is extremely graceful, if well put on....The mezzaro too has a great convenience, which is, that a woman can so hide herself in it, that she may walk all over the town unknown... (85)

クレイヴンは女性たちがこのような覆いによって匿名性を得られるのを羨ましく感じていたようで、人に知られずに町中を歩き回れて便利だと述べている。彼女の旅行記には、世間の悪意ある好奇の目を疎ましく感じるという記述が散見されるが、夫との離別の原因が夫婦双方の不倫スキャンダルだったという説があり、そのことが関係していると考えられる。

とは言うものの、賞賛のまなざしは心地よかったようだ。クレイヴンはハープが最も好きな楽器で旅先にも持ち運んでいたが、“I was pestered to death with questions about my harp at night. I find a harp with pedals is a very rare thing in Italy....” (93) と、まんざらでもない様子で述べている。また、彼女は自分の馬にサイド・サドルで乗ってよく移動をしていたが、“A lady on a side-saddle is an object of great wonder here....They actually fancy I have one leg only; their stare of

concern always makes me laugh....” (104-5) とあるように、イタリアの人々はその姿に驚異の視線を注いだようで、彼女は心配そうな視線に笑ってしまったと愉快そうに書いている。彼女は華麗な姿と所持品、社交術で多くの人々を魅了し、あらゆる場所で歓迎された。

クレイヴンは教養豊かな女性でもあった。彼女の手紙には古典や歴史書などへの言及が散見され、画家の名を引用しながら美術品を鑑賞したことをしばしば語っている。風景を眺める際も、当時流行していた「ピクチャレスクな」風景という枠組みを意識している²。たとえば、ボローニャからフィレンツェへ馬車で移動しているとき目にした風景について、“...but today the landscape improved much on my approaching Lozano. Some spots were not unworthy the pencil of Salvator Rosa” (121) と、クロード・ロラン (Claude Lorrain) と並んでピクチャレスクな風景画の模範とされた17世紀のイタリアの画家サルヴァトーレ・ローザに言及している。彼女のイタリア滞在の記録からは、本場の美術品や建築物、風景を鑑賞し、王侯貴族や外交官たちとの交際を通じて社交術を磨き、ネットワークを構築していく18世紀後半の教養ある貴族女性の姿が浮かび上がってくる。

3. ロシア表象

一方、ロシア滞在中の手紙には、各国の政治情勢や外交関係、社会のありかたに対するエリザベス・クレイヴンの関心が前景化されている。彼女はエカチェリーナ2世 (Catherine II) に謁見し、ポチョムキン (Potemkin) をはじめとするロシアの有力者たちと交流し、各国の公使たちからさまざまな情報を得たと記している。彼女はエカチェリーナ2世について、“It is but justice to say, that nothing can be more magnificent than the appearance the Empress makes when she comes into the drawing-room; she has a lively and good-humoured look, and her politeness to me was very great....” (165) と、壮麗で生き活きとした愛想のよい人物で、丁寧に接してくれたと好意的な印象を述べている。一方、ポチョムキンについては以下のように描写している。

You may have heard much of Prince Potemkin; I see him everywhere, but he is reserved and converses very little with ladies. I was invited by him to dine in an immense palace he is building in the suburbs....I sat by Prince Potemkin at dinner; but except asking me to eat and drink, I cannot say I heard the sound of his voice.... (172-4)

女性とはほとんど会話しないという記述からは、彼の用心深さ、抜け目のなさが伝わってくる。

また、クレイヴンは、ロシア貴族の暮らしぶりとエカチェリーナ2世の芸術への傾倒について次のように評価している。

...the nobles seem to vie with one another in extravagancies of every sort, particularly in foreign luxuries and fashion. The fashion of the day is most ridiculous and improper for this climate; French gauzes and flowers were not intended for Russian beauties, and they are sold at a price here which must ruin the buyers.

There are buildings erected for the reception of Arts and Sciences of every kind; for artists or amateurs, though but the surplus of Italy, France, and England, would find handsome encouragement and houseroom from the Empress, whose respect for talents, and generosity to those who possess them, have induced some, and would many more, to fix in the present capital of this vast empire.... (167-8)

ここでは、ロシア貴族が外国製の贅沢品に法外な値段を支払い、浪費を競い合っている姿が批判的に描かれると同時に、エカチェリーナ2世が芸術家や科学者を厚遇することでロシアに逗留するように心を砕いている様子が浮き彫りにされている。

さらにクレイヴンは、ロシアの商業重視の政策に注目し、ピョートル1世 (Peter I) が商業は帝国に不可欠の柱と考え、イギリスの貿易業者を歓迎したと指摘している。

Peter the First thought commerce an essential pillar to his empire, and the English trader was encouraged; our little island is a proof of the consequence which trade alone can give any country; and the new acquired possessions of the largest empires may only become additional trouble to their masters, unless the advantages of trade give them new life. (170)

そしてイギリスは小さな島国が商業で成功できることを証明した国であり、新たに獲得した領土は貿易の利点がなければ単に厄介事が増えるだけである、という見解を示している。

商業を重視するロシアの姿勢に刺激を受けたのか、クレイヴンは、自分はこ

れまで商業に携わる人々と交流する機会はなかったけれども、今後はロンドンで商人たちと会話を楽しみたいと述べ、イギリスの紳士教育を批判する。

A little Latin and Greek in the schools of Westminster and Eaton, and a great deal of vulgar rioting, make our young men a strange mixture of pedantism and vice, which can only produce impudence and folly. Thus tutored, at sixteen they are turned upon the hands of some unhappy man, who is to present them at foreign courts, with no other improvement or alteration in the boys heads, than that of their hair being powdered and tied behind. (170)

彼女は、「我が国の若者たちは、ウェストミンスター校やイートン校でギリシャ語・ラテン語をかじり、野卑な大騒ぎをすることで銜学と悪徳の奇妙な混合物となり、生意気で愚かな振る舞いばかりする」と、イギリスのパブリック・スクールでの紳士教育を皮肉り、外国の宮廷でデビューしても「髪に粉をふり、後ろで髪を結ぶことくらいしか学ばない」と、紳士教育の仕上げとして行われるグランド・ツアーについても冷ややかだ。旅によって彼女は、イギリスのジェントルマン教育およびイギリス社会のありかたについて批判的な視点を獲得したようである。

その後、スウェーデン公使から話を聞き、クレイヴンは、スウェーデンとデンマークを経由してドイツへ行く計画を中止し、クリミアに向かい、そこからコンスタンチノーブルを目指すことに決める。クリミアからコンスタンチノーブルにかけては、彼女のイスラム圏への関心が顕著に表れてくる。まずはクリミアでの滞在の様子から見ていこう。

ロシアによって獲得されたばかりのクリミアでは、軍人たちとの関わりが多く語られている。クレイヴンは将校たちから必要な地図と情報を提供してもらう。そして、造船所や要塞を見学したり、総督や領事、司令官の家に招かれて、さまざまなもてなしを受けたりする。馬に乗って遠出したときのエピソードについて、彼女は以下のように述べている。

The old Cossack chief had looked with the greatest astonishment at my riding, and when I jumped down from my horse on returning home, he kissed the edge of my petticoat, and said something in his language which I did not comprehend, but the general told me he had paid me the highest compliment imaginable, viz, I was worthy of being a Cossack.

In the evening I went in a carriage with the governor and general to

Karasbazar; and on the road saw a mock battle between the Cossacks. (225)

ここには、サイド・サドルで馬を見事に乗りこなすクレイヴンに対し、同行していたコサック兵が驚いて敬意を表し、翌日には彼女のために模擬戦闘を披露してくれたことが記されている。また、タタール人の後宮に招き入れられたときの様子については、次のように語られている。

This woman had a kind of turban on, with some indifferent diamonds and pearls upon it. Her nails were dyed scarlet, her face painted white and red, the veins blue; she appeared to me to be a little shriveled woman of near sixty, but I was told she was not above fifty....She made me a sign to sit down; and my gloves seeming to excite much uneasiness in her I took them off; upon which she drew near, smiled, took one of my hands between hers, and winked and nodded as a sign of approbation; but she felt my arm up beyond the elbow, half way up my shoulder, winking and nodding. I began to wonder where this extraordinary examination would end, which it did there....Our conversation by the interpreter was not very entertaining. (227-8)

ここでは、ターバンを巻いた50歳ほどの女性の外見が細やかに描写され、なぜかクレイヴンの手袋がこの女性の不安を掻き立てているようだったので外すと、ウィンクして頷きながら腕を肩のあたりまで触られた、という経験が語られている。淡々とした描写で、大げさな表現はなく、目にしたものをそのまま記録しているようである。通訳を通しての会話は面白くなかった、と感想もあっさりしている。

トルコとロシアの間で、商船は黒海からコンスタンチノーブルに入ってもよいが軍艦は不可、と決められているため、クレイヴンと付き添いの3人の将校は、商人という名目でコンスタンチノーブルへ向かう。クリミアを離れる直前、クレイヴンは“*Yes, I confess, I wish to see a colony of honest English families here... establishing a fair and free trade from hence, and teaching industry and honesty to the insidious but oppressed Greeks, in their islands, waking the indolent Turk from his gilded slumbers....*” (249) と、イギリス人の移民団がここにやって来て、富にあぐらかいた怠惰なトルコ人と、トルコ人に抑圧されている狡猾なギリシャ人に「勤勉と正直」を教え、公正で自由な貿易を確立してほしいと述べている。さらに“*...it is the honest wish of one who considers all mankind as one family, and, looking upon them as such, wishes them to be united for the common good; excluding*

from nations all selfish and monopolizing views” (249) と、人類はひとつの家族なのだから、すべての国は利己的な考えを捨てて一致団結し公益を目指すべき、とコスモポリタンの見解を示している。

4. トルコ・ギリシャ表象

トルコでは、クレイヴンはペラのフランス大使の屋敷を拠点とし、ギリシャの島々巡りなどを楽しむ。フランス大使は画家を雇い、ピクチャレスクな風景を描かせて収集しており、クレイヴンと趣味があったようだ。彼女は墓地での散歩を楽しみ、墓石の一番上は生前の職業や身分を表すターバンになっていると興味深そうに語っている。また、古代ギリシャの遺跡がトルコ人によってごとく破壊されていることもたびたび伝えている。

彼女がトルコ人やイスラム文化に注ぐまなざしはかなり冷ややかである。

In these holy temples neither the beautiful statue belonging to Pagan times, nor the costly ornaments of modern Rome, are to be seen: some shabby lamps, hung irregularly, are the only expense the Mahometans permit themselves, as a proof of their respect for the Deity or his Prophet....I saw several Turks and women kneeling, and seemingly praying with great devotion. Mosques are constantly open; and I could not help reflecting that their mode of worship is extremely convenient for the carrying on a plot of any sort. (286)

これは、聖ソフィアを訪問した際の記述である。1710年代にトルコ大使夫人としてコンスタンチノーブルを訪れたメアリ・モンタギュも聖ソフィアを訪れ、このキリスト教の聖なる場所がトルコ人によってモスクに変えられたことを嘆く詩を書いているが、モンタギュの悲壮感漂う詩とは対照的に、クレイヴンの口調は侮蔑的で、その描写はリアルである³。

トルコ高官の後宮を訪問した際には、クレイヴンたちの姿を見ておびえ、黒人女性の腕の中に身を隠すトルコ高官の義理の妹の様子を、彼女は次のように語っている。

In some there was nothing to be seen, in others two or three women sitting close together; in one, a pretty young woman, with a great quantity of jewels on her turban, was sitting almost in the lap of a frightful negro woman; we were told she was the Captain Pacha's sister-in-law; she looked at us with

much surprise; and at last, with great fear, threw herself into the arms of the Black Woman, as if to hide herself. We were called away into a larger room than any we had seen, where the Captain Pacha's wife, a middle-aged woman, received us with much politeness... (293)

クレイヴンは、怖がる少女の姿を見て、驚かせたことを申し訳なく思う気持ちも気遣う素振りもまったく示さず、淡々とその情景を描写している。さらに、後宮訪問を終え、外で待っていた男性陣と合流して馬車で帰ろうとしたとき、後宮の使者がやってきて、後宮の女性たちを楽しませるために中庭を2～3回周ってほしいと頼まれたエピソードは、次のように語られている。

Our gentlemen were very curious to hear an account of the Harem, and when we were driving out of the court-yard, a messenger from the Harem came running after us, to desire the carriages might be driven round the court two or three times, for the amusement of the Captain Pacha's wife and the Harem, that were looking through the blinds; this ridiculous message was not complied with, as you may imagine; and we got home, laughing at our adventures. (296-7)

「この馬鹿げたメッセージ」という表現には、クレイヴンの後宮の女性たちに対する軽蔑が表れている。メアリ・モンタギュも『トルコ書簡』で後宮訪問の様子を語っているが、そこには敬意が感じられ、トルコ女性の賢明さや美しさが前景化されており、クレイヴンの記述とはきわめて対照的である⁴。

トルコ風呂を訪れたときの記述も、エリザベス・クレイヴンとメアリ・モンタギュの態度はまったく異なる。モンタギュはトルコ風呂で目にした女性たちをギリシャ神話の女神になぞらえていたが、クレイヴンは“*These Baths are the great amusement of the women, they stay generally five hours in them...but I think I never saw so many fat women at once together, nor fat ones so fat as these*” (342) と、見下したように述べている。クレイヴンの言葉には遠慮や気遣いがなく、彼女は自分が抱いた印象をそのまま率直に伝えているようである⁵。

5. おわりに

ここまでクレイヴンの旅行記におけるイタリア、ロシア、トルコ・ギリシャ表象に注目し、それぞれの国における彼女のまなざしと経験、表現について読

み解いてきた。イタリアに関しては、見慣れぬ景色や人々の様子に気持ちが高揚したこと、多くの美術品・建築物を鑑賞・見学したこと、貴族や外交官たちとの社交に励んだこと、ハーブやサイド・サドルで人々の注目を集めたことなどが主に語られていた。彼女のイタリアでの旅は、それまでは書物で眺めるしかなかった美術品の現物を現地で鑑賞して教養を深め、パーティーなどに参加して社交術を磨くというグランド・ツアーの側面が最も色濃く出たものであった。

一方、ロシアに関しては、エカチェリーナ2世やポチョムキンをはじめとするロシアの要人や各国の公使たちと交流し、ロシアやヨーロッパ諸国の情勢についてさまざまな情報を得たこと、ロシアの商業重視の政策に刺激を受けてイギリスのジェントルマン教育について批判的な視点を得たことなどが語られていた。ロシアでの旅は、外国の政情を知り、各国の要人たちとのネットワークを築くというグランド・ツアーのもうひとつの側面が前景化されていた。

クリミアからの手紙では、軍人たちから地図や情報を入手し、現地で知り合った人々のネットワークを利用してトルコへ渡る手段を確保したこと、コサック兵たちが彼女のために模擬戦闘を披露してくれたこと、初めて訪れた後宮でのもてなしの様子などが語られていた。そして、人類はひとつの家族なのだから、すべての国は利己的な考えを捨て、団結して公益を目指すべきだとコスモポリタンのような見解が表明されていた。クリミアからトルコ・ギリシャにかけての旅は、イスラム圏との遭遇を契機にグランド・ツアーとは別の要素が表れてきたと言える。

トルコ・ギリシャでは、ピクチャレスクな風景や遺跡に深い関心を持つフランス大使の家を拠点としながら、ギリシャの島々を巡ったこと、聖ソフィアやトルコ高官の後宮、トルコ風呂などを見学に出掛けたこと、トルコ人が古代ギリシャの遺跡を破壊していることなどが語られていた。後宮やトルコ風呂で目にした女性たちの姿は冷静な目で観察され、リアルに描写されており、彼女より約70年前にトルコを訪れたメアリ・モンタギュの熱狂とは対照的である。トルコ・ギリシャでのクレイヴンの旅は、当時のイギリスではまだ情報量の乏しかった地域での稀有な経験に満ちていて、グランド・ツアーというよりは女性の冒険譚とでも呼ぶべきものになっている。

18世紀末にフランス、イタリア、ロシア、トルコ、ギリシャなどを旅したエリザベス・クレイヴンの旅行記は、女性版グランド・ツアーの記録であると同時に、当時流行していたピクチャレスク・ツアーの側面や女性の冒険譚の側面を併せ持つ興味深い作品である。女性の旅行記研究への関心が高まり研究環境が整いつつある中、今後さらなる新たな視点からの研究が期待される⁶。

注

1. グランド・ツアーについては、Christopher Hibbert, *The Grand Tour* (Thames Methuen, 1987); Sweet Rosemary, *Cities and the Grand Tour: the British in Italy, c. 1690-1820* (Cambridge UP, 2012) 参照。
2. ピクチャレスク・ツアーについては、Malcolm Andrews, *The Search for the Picturesque: Landscape Aesthetics and Tourism in Britain, 1760-1800* (Stanford UP, 1989); Stephen Copley and Peter Garside, ed. *The Politics of the Picturesque: Literature, Landscape and Aesthetics since 1770* (Cambridge UP, 1994) 参照。
3. メアリ・モンタギュの聖ソフィアの詩については、志渡岡理恵「モンタギュー夫人『トルコ書簡』におけるトルコ表象—オリエンタリズムと種痘—」『お茶の水女子大学人間文化研究年報』第26号（2003）32 参照。
4. メアリ・モンタギュのトルコ女性の表象については、志渡岡理恵「『マホメットの楽園』を旅して——メアリ・モンタギュとトルコの女性たち」窪田憲子・木下卓・久守和子編著『旅にとり憑かれたイギリス人——トラヴェルライティングを読む』（ミネルヴァ書房、2016）258-61 参照。
5. メアリ・モンタギュのトルコ風呂の表象については、志渡岡理恵「モンタギュー夫人『トルコ書簡』におけるトルコ表象—オリエンタリズムと種痘—」35 参照。
6. イギリスの女性の旅行記に関する最新の研究の状況については、志渡岡理恵「歴史の現場からのレポート—1840年以前に出版された女性の旅行記」『女性とジェンダーの歴史』第8号（2021）9-14 参照。

参考文献

- Andrews, Malcolm. *The Search for the Picturesque: Landscape Aesthetics and Tourism in Britain, 1760-1800*. Stanford UP, 1989.
- Aravamudan, Srinivas. “Lady Mary Montagu in the Hamman: Masquerade, Womanliness, and Levantinization”, *ELH* 62: 1 (1995), 69-104.
- Bohls, Elizabeth. *Women Travel Writers and the Language of Aesthetics, 1716-1818*. Cambridge UP, 1995.
- Colbert, Benjamin. “British Women’s Travel Writing, 1780-1840: Bibliographical Reflections”, *Women’s Writing* 24: 2 (2017), 151-69
- Copley, Stephen and Peter Garside, ed. *The Politics of the Picturesque: Literature, Landscape and Aesthetics since 1770*. Cambridge UP, 1994.
- Craven, Elizabeth. *A Journey through the Crimea to Constantinople*. Arno Press, 1970.
- Dolan, Brian. *Ladies of the Grand Tour: British Women in Pursuit of Enlightenment and Adventure in Eighteenth-Century Europe*. HarperCollins Publishers, 2001.

- Gaspar, Julia. *Elizabeth Craven: Writer, Feminist and European*. Vernon P, 2018.
- Hibbert, Christopher. *The Grand Tour*. Thames Methuen, 1987.
- Koundoura, Maria. “Between Orientalism and Philhellenism: Lady Mary Wortley Montagu’s ‘Real’ Greeks”, *The Eighteenth Century* 35:3 (2004), 249-64.
- Landry, Donna. “Horsy and Persistently Queer: Imperialism, Feminism and Bestiality”, *Textual Practice* 15:3 (2001), 467-85.
- Leask, Nigel. *Curiosity and the Aesthetics of Travel Writing 1770-1840*. Oxford UP, 2002.
- Melman, Billie. *Women’s Orients: English Women and the Middle East, 1718-1918: Sexuality, Religion and Work*. U of Michigan P, 1992.
- O’Loughlin, Katrina, *Women, Writing, and Travel in the Eighteenth Century*. Cambridge UP, 2018.
- Palmer, Caroline. “‘I will tell nothing that I did not see’: British Women’s Travel Connoisseurship, 1776-1860”, *Forum for Modern Language Studies*. 51:3 (2015), 248-68.
- Rosemary, Sweet. *Cities and the Grand Tour: the British in Italy, c. 1690-1820*. Cambridge UP, 2012.
- Still, Judith. “Hospitable Harems? A European Woman and Oriental Spaces in the Enlightenment”, *Paragraph*, 32:1 (2009), 87-104.
- Thompson, C., “Journeys to Authority: Reassessing Women’s Early Travel Writing, 1763-1862”, *Women’s Writing*. 24: 2 (2017), 131-50.
- Tuson, Penelope. *Western Women Travelling East 1716-1916*. The Arcadian Library in association with Oxford UP, 2014.
- Weitzman, Arthur J. “Voyeurism and Aesthetics in the Turkish Bath: Lady Mary’s School of Female Beauty”, *Comparative Literature Studies* 39:4 (2002), 347-59.
- 志渡岡理恵「モンタギュー夫人『トルコ書簡』におけるトルコ表象—オリエンタリズムと種痘—」『お茶の水女子大学人間文化研究年報』第26号、2003年、32-8。
- .『『マホメットの楽園』を旅して——メアリ・モンタギューとトルコの女性たち』、窪田憲子・木下卓・久守和子編著『旅にとり憑かれたイギリス人——トラヴェルライティングを読む』ミネルヴァ書房、2016年、249-68。
- .「歴史の現場からのレポート—1840年以前に出版された女性の旅行記」『女性とジェンダーの歴史』第8号、2021年、9-14。

* 本稿は、2021年10月17日に開催されたイギリス・ロマン派学会第47回全国大会（オンライン）における研究発表に加筆・修正を施したものである。